

ヘーゲルの論理学の思弁性

石 黒 光 治

Hegel は小論理学79節で、論理的なものの三つの側面として(1)抽象的或は悟性的側面、(2)弁証法的或は否定的理性的側面、(3)思弁的或は肯定的理性的側面を挙げている。一口に弁証法的といわれる Hegel の論理学は詳しくは上の三つの側面を具えている。そしてこの三つの側面は三つの部分でなく、三つの契機である。部分なら各々を一応切り離してみることもできるが、契機なら相互に浸透し合う不可分のものであり、もし強いて切り離せばその真理性を失ってしまう。

「悟性としての思惟は固定した諸規定性と、それらの相互の区別に立ちどまっており、そういう制限された抽象的なものがそれだけで成立し存在するとみなす」のである (Syst. § 80*)。その働きは「その内容に普通性の形式を与える」ことであるが、その原理が「同一性、単純な自己関係」であるために、悟性によって措定された普遍は抽象的普遍である。従って悟性は直接的な知覚や感情のように具体的なものに関わるのではなく、対象に対して分離的抽象的態度でのぞむ。けれども理論の領域においても実践の領域においても、対象がはっきりした対象としての規定性をもつのはこの悟性の原理による。(Syst. § 80 Zusatz.)

* Hegel からの引用は Glockner 版全集, Dritte Auflage der Jubiläumsausgabe 1955年版による。

弁証法的契機は「こういう有限的諸規定の固有の自己止揚であり、その反対の諸規定への移行である。」その止揚はそれに固有の、それ自身より生ずる止揚であって、外からの反省による止揚ではない。有限的なものは外から制限されているだけでなく、それ自身で制限されているもの、それ自身で変化し消滅するもの、即ち否定的なものである。そういう悟性の諸規定の一面性と制限性とは、それらの本来あるところのものとして、即ち否定として示されるのがそれ自身の弁証法である。だから弁証法は悟性の諸規定性を越え出る働きであ

るが、それは有限的な諸規定性そのものの本性に属することである。だから弁証法による悟性的諸規定性からの超出は「内在的超出」*das immanente Hinausgehen* である。(Syst. § 81)

「思弁的なもの或は肯定的理性的なものは対立のうちにある諸規定の統一即ちその規定の解消とその移行のうちに含まれている肯定的なものを把握する。」悟性が固定的に規定し、規定したものを固執するのに反して、理性は悟性の有限的な諸規定性を否定し無の中に解消するという意味では理性は否定的であり弁証法的であるが、理性は単に無の中に立ち止まっているだけでなく、否定を通じて新しく肯定的なものを把握する。その把握する「肯定的なもの」とは、それら否定される諸規定性と対立的に並んであるような別な或る規定性ではなく、否定された規定性がその規定であるようなそれを含むところのものである。それは弁証法的な否定が抽象的一般的否定でなく、特定の規定性の否定であり、否定によって否定される規定性の根源を顕示するからである。これが思弁的契機である。そこで把握される肯定的なものはその規定性を含む統一であるが、単純な同一性という形式的統一でなく、「区別された諸規定の統一」である。(Syst. § 82)

上述の論理的なものの契機は部分ではなく契機であるから、先ず悟性的契機が、次に弁証法的契機が、そして最後に思弁的契機が働くというように時間的順序に従って働くのではなく、三つの契機は同時に働く一つの働きをなすのである。⁽¹⁾ *Kroner* の所謂 *Dreieinigkeit* である。悟性的契機によって固定的規定性が措定されると同時に、その規定性は否定的なものであるというその有限性の本性によって弁証法的にそれ自身によって否定され、その反対の規定性に移行しその反対の規定性も同様に直ちに止揚され、二つの対立する規定性は思弁的統一の中で回復される。悟性的なものの本性が弁証法的に明らみに露呈し、その真理性が思弁的統一として顕現する。だから思弁的契機は契機としては前の二つの契機の総仕上げであり、それらと並ぶ第三の契機であるが、そこに顕現した思弁的なものは悟性的なもの及び弁証法的なものに次ぐ第三のものではなく、悟性的なものと弁証法的なものとを契機として含むそれらの統一的全体である。*Mure* はこの三つ組 *triad* を最小の理性的なもの *minimum rationale* であると云い、⁽²⁾ *Hyppolite* は *minimum rationale* は *triad* 以外にはない⁽³⁾と云う。*Hegel* の論理はその中に悟性的なもの及び弁証法的なものと並んで思弁的なものをも含んでいるのではなく、その全体が思弁的特質のものである。

この triad としての *minimum rationale* は有の領域では有一無一成の形式で本質の領域では同一性—区別—根拠の形式で、そして概念の領域では普遍—特殊—個の形式で現われる。

純粹有は論理学の始めをなすが、それは最初のものとして全く無規定的な純粹の抽象であるから、まだ何物でもないという絶対に否定的なものであり、純粹の無である。純粹無は同様に無規定であり、直接的に自己自身に等しいものとして純粹有と同じものである。有は無であり、無は有である。有と無は有及び無として区別がありながら同時に等しい。その真理は両者の統一として成である。(Syst. § 86. § 87. § 88)

本質は直接的な有がその直接性から脱出して「それ自身の否定性を通じて自己を自己へ媒介する有」という自己内反省である (Syst. § 112)。だから本質は同一性ではあるが悟性の抽象的直接的同一性ではなく、反省した自己との関係としてあるところの自己との同一性 *Identität mit sich* である。その中には直接的有としての自己の否定が含まれており、自己自身の区別がある。それは区別を拒斥し排除する同一ではなく、区別を含み、区別の中で、区別において成立つ同一性である。この区別と同一との真理は両者の統一としての根拠である。* (Syst § 115 § 116 § 121)

* このことについては文理学部紀要第16号及び第17号で詳しく検討しておいた。

純粹な概念の契機は普遍性と特殊性と個別性である。普遍性は純粹有及び同一性に対応するが、直接的有でもなく、相関的な同一性でもなく、その規定性のうちにあつて自己自身との自由な等しさであり、従つて普遍はそれ自身のうちに特殊と個とを含むところの自己同一的なものである。特殊性は無及び区別に対応するが、純粹有に対する他者の如きものでもなく、同一なるものの反省的な区別の如きものでもなく、その中にあつて普遍が曇りなくいつもそれ自身と等しくあるところの規定性である。特殊は自己のうちで普遍的であり、そして個として存在するという意味を含んだ区別或は規定性である。個別性は成及び根拠に対応するが、成とも根拠とも違つて、普遍性及び特殊性という規定性の自己内反省である。個は即自且対自的に規定されたものであり、類と種を自己の内に含み、そしてそれ自身実体であるところの主体、或は土台であるという意味をもっている (Syst. § 163. § 164)。

triad は上述のように各々その領域においてその形式を異にするが、そのどれも *minimum rationale* として *Dreieinigheit* であることにおいては変りはない。

い。Mure は triad が minimum rationale であることを理解するには Hegel の活動の概念を理解しなければならないと云う。Mure によれば活動は精神の活動である。——大論理学第一版の序文 (Log. I. s. 17) における Hegel の説明によると、精神は弁証法的ならびに思弁的理性の真実態であり、それは単純なものを否定するが故に悟性の規定的区別を措定し同時にまたそれを止揚しもする弁証法的なものであるが、その成果の無の中で肯定的でもあり、そして最初の単純なものをそれ自身具体的な普遍として回復するものである。その精神を小論理学34節の補遺で、「精神はスコラ哲学者が神を絶対の活動と呼んだ意味において活動である。」と云う。その所謂活動を Mure は的確に Spirit not has but is activity. と云う。精神が活動をするのでもなく、活動が精神に所属するのでもなく、精神は活動そのものであり、活動が精神そのものである。そしてその活動は自己分割と自己融和であるが、それは時間の中の活動——変化——ではない。従ってそこには活動以前の主体と、自己分割されている主体と、自己と融和している主体との三つの時間上継起する舞台があるのではない。Mure は Hegel の大論理学の言葉「真理であるところのものは有があるのでもなく、無があるのでもなく、有が無へ、また無が有へ——移行するのでもなく、——移行してしまっていることである。」(Log. I. s. 88-89) を取り上げて、現在形を完了形に置きかえたのは、その活動が時間的なものでないことを示そうとする意図からのことであるとする。Noël が Hegel の成を時間の中の変化とみるべきでなく、論理的成 un devenir logique とみるべきであると云うのも同じ越旨である。⁽⁵⁾

精神が活動するのでもなく或は活動を具えているのでもなく、活動そのものであるということ、このことが Hegel の哲学の根本である。Hyppolite の云うように Hegel の思弁的論理学が古い形而上学にとって代った⁽⁶⁾のは、存在するものとしての実体を主体としての活動そのものとしたことによる。超越的實在に代る活動する主体は理性である。理性は主観と客観を通じて一つである。現実には存在する理性であり、認識する思惟は自覚的理性である (Syst § 6)。現存する現実には諸々の規定性としてあるが、規定性は有限性であり、変化的消滅的である。理性はそれら有限的消滅的な諸規定性の内的生命であり、魂であって、それらの内にある。が理性は現存の諸規定性が有限的で消滅的であると同じ意味で有限的でもなく、消滅的でもない。それかといって理性はそれら諸規定性から離在する或る実体でもない。それらの内にあるそれらの内性生命であると

ころの理性とは自ら自己を有限的に規定する働き、即ち自己を区別し分割する働きである。Spinoza の云う如く、すべての規定は否定である。理性は自ら自己に対して否定的に働く否定的活動である。理性が否定的に働くのではなく、否定的働きが理性である。理性が自己を否定的に規定して、有限的規定性を自己に与える自己分割は自己の外に出ることである。しかも諸規定性の内的生命であるところの理性は自己の否定的規定性の中であって自己と一致し自己と融和する。この融和は規定性の独立的存立性の否定によってのみ可能である。だがこの否定は有限的規定性の本性から生ずる自己否定であって外からの力による否定ではない。理性は自ら自己を否定的に規定しながらも、その否定的規定性以外のどこにも存在しないからである。理性はこうして否定的転回によって自己と合一し自己を回復する。真実なものは実体であるばかりでなく主体であるという言葉 (Phän. s. 22) は理性が働く主体であるというよりは、働きそのものとして主体であると云うべきである。無限なものが自己自身から出ることを如何にして決意するかの間に対して、Hegel が無限なものとは有限なものとの動かぬ対立という前提に基いているこういう間に対しては、こういう対立は真理でないこと、無限なものは実際に永遠に自己から出ており、そしてまた永遠に自己から出ていないと答えるだけでよいと云う (Syst. § 94) のは活動そのものである主体としての理性の本質的特質を表現する言葉である。Hegel の論理学が抽象的同一性を土台とする自同律の原理に立つ形式論理学をこえて、異なるものの同一、矛盾の自己同一を原理とする弁証法的論理である所以のものは真実体を主体とみるこの形而上学としての論理学の当然の帰結である。その論理学の思弁的特性もまたそこにある。

Hegel の論理学の思弁的特質を考えるに当って最も大切なものは、論理的なものの三つの契機のうち第三の契機であることは言うまでもないことである。Hegel 自身も「対立するものをその統一の中に、或は否定的なものの中に肯定的なものを把握することのうちに思弁的なものが成立つ」と云い、そしてそれは「最も重要な側面であるが、まだ未熟な自由でない思考力にとっては最も困難な側面である」と云う (Log. I. s. 54-55)。というのは対立を統一の中に把握するといっても、それは対立を単に対立として放置すること (悟性的分離) でないのは勿論であるが、対立を解消して対立のない同一として把握すること (悟性的抽象的同一) でもなく、悟性の固執する対立がそれ自身崩解することを洞察し (弁証法的契機)、対立する両規定を対立の中に維持しながらそ

れを止揚して統一の中に置かなければならないからである。これが思弁的な統一である。こういう思弁的统一は一方では同一であると同時に他方では区別されてある。同一というも区別というもそれぞれ固定した状態を云うことになる。ところが思弁的统一とはそういう静止した状態ではなく、自己を分割して自らを区別しながらその区別項の止揚によって自己にかえり自己と一致する運動そのものである。だからこういう思弁的なものは命題でもって表現することはできない。なぜなら命題は規定されて固定した結果を表現するものであって相反する二面を具えた精神の否定的な働きを表現できる命題はないからである。有と無の統一としての成について小論理学88節に「成は有と無の統一であるだけでなく自己の中の動揺 *die Unruhe in sich* である。——単なる自己関係として不動な関係でなく、自己の内にある有と無の差別によって自己の内において自己自身に対立している統一である」と云う。この自己の内にある動揺は命題に表現することはできない。判断は主語と述語の同一関係を云い表わすのに、思弁的内容においては主語と述語の非同一もまた本質的契機であるからである (Log. I. s. 99)。

Hegel が精神或は理性を規定的現存から超越的に存在するものでなく、それに内在的であるとする点だけを見ると汎神論的であり、Spinoza の汎神論に通ずるものがある。しかしそれが実体でなく主体であるという点では Spinoza にはみられない Hegel 独自の立場がある。Hegel は (小論理学第二版の序文で) Spinoza の哲学に言及して、Spinoza の哲学においては神は実体と規定されているだけで、主体及び精神として規定されていないこと、そういう見解に基いて神を実体と見做してすべてのものは同一であるという同一哲学のみる同一は統一の最も悪い様式であることを指摘している。統一の最も悪い様式というのは、思弁的な動的な——具体的な——統一からその生命を奪って枯渇した悟性の抽象的な静的な同一性に薄めた様式であるということである。だから Hegel は実体とみるか主体とみるかの区別が統一の規定に関わる重要な問題であるというのである。現実を思弁的具体的にみるか悟性的抽象的にみるかは真実なものを実体とみるか主体とみるかのこの区別に関わるのである。

自己分割と自己融和の活動は精神或は理性の、自己から出て自己にかえる円環的活動であり、この円環的活動が Hegel の哲学に特有な「無限」の概念であり、この無限性とその哲学の思弁性を表示している。Hegel は「無限」を悪無限と真無限とに区別しているが、悪無限は論理的なものの最初の二つの契機

即ち抽象的悟性の側面と弁証法的な否定的理性の側面において成り立つ。真無限は第三の契機即ち思弁的な肯定的理性の契機によって始めて成り立つ。無限を悪無限と真無限とに区別するといっても、無限性に二つの種があるというのではなく、悪無限は無限性の有限的な非真実な現われであり、その真理は真無限である。無限としては真無限があるのみである。

規定的現存はすべて規定されてある限り有限的である。有限的であるということ、それ自身としては肯定的に存立しており、外から他者によって限界づけられているということではなく、その有限的規定性それ自身が否定的であるということである。「非有がその本性、その有を構成している」のであり「有限的なものは存在するが、その存在の真理はその終りである。」だから有限なものは単に変化するだけでなく「滅びる」のである、それも滅びることがあり得るというのではなく、その存在そのものの中に滅びることが含まれており、その存在そのものが「滅亡の萌芽を自己内存在そのものとしてもつということであり、その生誕の時がその死滅の時である」(Log. I. s. 147-148)。悟性的思惟においては肯定的存在とされる有限的規定性は弁証法的に有が無であり、生起が消滅であるというそれ自身の矛盾が明らかになり、そして有限的存在は越えられる。その際その有限的なものからの超出がその外への超出であるとき、Hegelの所謂悪無限が生ずる。何故なら有限的規定性から外に出て、そこに見出される規定性もまた同様に有限的規定性であり、その超出の過程は際限なく無限に続くであろうからである。そこでは有限性はその本性上超出される「べき」であるとされるだけで永遠に越えられることはない。HegelはKantやFichteの当為の立場をこういう悪無限の立場と見て、それを制限の超越ではあるが、しかし「不完全な超越」或は「有限的な超越」と評し、そういう立場を有限性や矛盾を固執する立場であるとみなすのである(Log. I. s. 155-156)。

当為の立場が有限性や矛盾を固執する立場だということは、それが弁証法的契機にまで進んだもののまだ思弁的契機に到達していないということである。有限性を無常なもの滅びるものと見るのはよいが、悟性はそれを有限的なものに不可分に結びつけ、有限的なものに固着したものとなし、有限性を永遠なもの、不滅なものとして絶対化するために、有限的なものは永遠に無限的なものと結びつかず、それ自身で存立するものとされる。有限的なものからの超出が外への超出となるのはそのためである。そこでは非有が存在するという矛盾が

未解決のまま放置されてある。当為の立場はこのように有限的なものをあくまで有限的なものとして、無限的なものと分離し対立させて考える悟性の合理的思惟の中に立止っているのである。有限性自身の矛盾が露呈されることは勿論大切なことであるが、更に一層大切なことはその矛盾を繰り抜げる（悪無限）だけでなく、矛盾を解決すること（真無限）である。「有限性の存在に固執し無常が常に存立するとみるか、無常と滅亡とが滅びるとみるかが肝要である」（Log. I. s. 147）。

有限的なものの矛盾の解決は「有限的なものが単に無常なものでありそして滅びるだけでなく、その滅亡その無が窮極的なものでなく滅びること」にある（Log. I. s. 150）。有限的なものは確かに無常なもの、滅びるべきものであるが、その有限性が永遠化され絶対化されると、一つの有限的なものは滅びてもそれに代って常に新しい有限的なものが出現し永遠に無限的なものには到達しない。悪無限は有限的なものと無限的なものとを対立させ、有限的なものに無限的なものと同様の不滅性、永遠性を附与する悟性の抽象的思惟である。有限的なものを、それが本来ある通りに否定的であり非有であるとすることは有限性の無常滅亡性を止揚することであり、それによって有限的なものは無限的なものの中に入りこみ、無限的なものと結びつき、有限性の中で無限性を獲得し無限的なものとなるのである。有限的なものの本性は「自己を超出すること、自己の否定を否定すること、そして無限的となること」であり（Log. I. s. 158）、そして「有限的なものはその外にある力としての無限的なものによって止揚されるのでなく、それ自身を止揚することが有限的なものの無限性である」（Log. I. s. 169）。有限的なものの本性は非有であるが、それにも拘わらず有限的なものがそこに存在する。この有限的なものの「存在」は有限的なもの自身の存在ではない。「有限的なものは肯定的なもの、即ち無限的なものから肯定を受けとり、そしてそのようにして滅亡する」（Log. I. s. 149）。有限的なものが肯定的なもの即ちその「存在」を無限的なものから受けとるのであり、そしてそうすることによって有限的なものとしては滅亡し、無限的なものによって存在することになり、その有限的規定性が無限的なものの有限的規定という意味を獲得するのである。

無限的なものの側面からみれば、有限的なものと対立しこれと並ぶ無限的なものは、ほかでもないそのことによって、その有限的なものと並ぶもう一つの有限的なものとなる。無限的なものはそういう在り方においてあるのでなく、

その直接的規定は「有限的なものを越え出る脱出」であり、その本性は「有限的なものの否定」である。だから有限的なものは「超出されなければならないもの」であり、「それ自身の否定」であり、そしてそのこと自身がそれの「無限性」なのである (Log. I. s. 166)。だから有限的なものからの超出はそれの外へ向かっての超出である必要はないし、またそうであってはならないのである。有限的なものはそれ自身の、それ自身による否定的止揚によって、有限的なものとしてあるその場で無限的なものの中に融けこむ。逆にまた無限的なものは有限的なものこの止揚によって、有限的なものにおいて自己自身にかえり自己と一致する。こういう有限的なものとの統一もまた、有限的なものが無限化したり、無限的なものが有限化したりして無区別の同一になることではない。有限的なものが無限化されるのはその独立性の止揚によって無限的なものの契機となることによるのである。無限的なものの有限化はそれ自身の分割、即ち否定的規定による。だが無限的なものの否定的規定はそれの一つの契機にすぎず、無限的なものは本来自己の否定的規定の中にあっても、その否定によって自己自身へかえり自己自身と一致する活動として常に無限性を保持している。だから「無限的なものは肯定的なものであって有限的なもののみが止揚されたものである」 (Syst. § 95)。無限的なものが肯定的なものであるというのは、肯定的存在としてあるという意味ではなく、活動として肯定的であるということであるのは云うまでもない。先に挙げた小論理学の言葉「無限的なものは実際永遠に自己の外に出ており、そしてまた永遠に自己の外に出ていない」というのはこの真無限的な否定的活動を云い表わしているのである。有限的なものとの統一は二つのものを足して2で割るような折衷でもなければ、酸と塩との中和の如きものでもなく、無限的なものが有限的なものを媒介として自己自身と一致する円環的活動であるから、その中に有限的なものを無限的なものの有限なものとして含む統一である。

Mure は Hegel のこの真無限を評して「Hegel の真無限は無際限の進行の最後の項でもなく、有限的なものとの反対物でもなく、有限的なものとの自己他化という悪無限との総合即ち他の多くの有限的な項の中で自己を完成しようとする有限的なもの^(の)の果てることのない努力との総合であることを見ることが最も大切なことである」という。その云わんとするところは真無限は有限と並ぶ存在でもなく、永遠の課題としての当為でもなく、有限的なものとその有限

性という否定的非有を自己否定によって脱出しそれを越える歩みの一歩々々が真無限であるということである。Hegel は神聖化における際限のない苦悩を永遠のものとなし、融和そのものを天に向かっての歎息となすプロテスタンティズムをキリスト教の最後の形態ではありえないとなし、それが外来的な神の力を除去して後に始めて精神は精神として自己固有の形態において神聖なものとなり、新しい宗教の中で自己との根源的な融和を回復することができる、そこでも限りない苦悩と対立の苦難とは見出されはするが、それらは純粹に曇りなく解決されるという*。Hegel は プロテスタンティズムの立場を Kant 的当為の立場と見て、真の救いは永遠の苦悩と対立の苦難とが今日只今この現実の脚下で解決された喜びの日日の歩みの中にあるとみるのである。Mure は先の言葉につづけて「有限的なもの或は悪無限を現実の真の特性であると見做すなら——たとえその両者を一諸に結びつけて考えるにしても真無限と引離して考えるなら——それは自己超越なしに哲学しようとする悟性の無駄な努力である⁽⁸⁾」と云う。また Marcuse は Hegel のこの「有限性を無限性として把握すること」は Hegel が「あらゆる神学的規定に対抗して有限性を存在者の歴史性としてはっきり把握していることを明瞭に示している⁽⁹⁾」と云う。論理学のこの思弁性は単なる知識ではなく、自己超克という強靱な意志を前提し、意志と結合している。Marcuse の云う「歴史性」は意志による自己実現の営みである⁽¹⁰⁾。Kroner は Hegel のロゴスを「思惟する意志」とも「思弁的实践理性」とも云う。

* Kroner は Von Kant bis Hegel の II. s. 237 の脚註で Rosenkranz が Hegel の散逸した手稿として伝えているところから引用して Hegel の思弁的哲学の特質を説明している。Rosenkranz: G.W.F. Hegels Leben, s. 140-141

精神の活動は自己から出て自己にかえる無限的な円環的活動そのものである。しかもその活動は自己の否定的規定性を否定することによる自己との融和である。そして自己との融和は抽象的な自己同一的存在となることではない。有限的规定性の中で、従って対立項をそのままにして、その場でその否定によって果たされる自己との融和である。そこには直接的にそれ自身で存在する何物もない。活動の出発点としても、中間の分割された諸規定性においても、またその帰着点においても。直接的に存在するように見えるものは規定性だけであるが、規定性はすべて契機にすぎない。契機は媒介である。理性——それは概念と呼ばれようと精神や理念或は絶対者と呼ばれようと——とは直接には

何物でもなく、ただ有限の規定性として現存する諸々の形態において媒介的に自己を顕示し、その媒介を通じて媒介の中で自己にかえり自己と一致する。媒介を通じて自己にかえるといっても、直接存在としての自己になるのではない。媒介項を通じて媒介項においてその否定的措定の活動として自己であるのみである。

媒介という点からみると有—無—成の **triad** においては有も無も存在する何物でもない。ただ有から無へ、無から有への移行の活動即ち成があるのみである。有も無も成の契機である。そして成自身もまた成という独立的存立を保持するものではない。成は有と無がその移行において止揚されることそのことである。成は支えのない動揺 **eine haltungslose Unruhe** である。本質の同一性と区別と根拠の **triad** においても、同一性は直接的な同一的存在の同一性ではなく、自己の中で自己に反省する自己との同一性であり、そこには自己分割による区別がある。根拠は区別されたものの否定的止揚による同一性の回復であるが、区別を保持したままでの区別の止揚による相関関係としての同一性である。ここにも直接的に存在するものはない。有の領域では活動が移行であったのに、本質の領域では相関関係であるという点で異なるだけである。概念の領域における普遍—特殊—個においても事情は同じである。概念においては普遍も特殊も個も単純な媒介的契機であるだけでなく、それぞれがまた他の契機を含む全体でもある。ここでは媒介が止揚されて直接性を回復しているが、単純な有的直接性ではない。従ってそれは有限的な有的存在でなく、その有限的、特殊の規定性が同時にそれを媒介する全体でもあるという意味を含んだ直接性である。

絶対者が実体でなく、主体として精神であるということから当然の帰結として、絶対者が経験的現実を自己の媒介とするその内的生命、魂であること、経験的現実的なものは絶対者を媒介する契機であるということが導出される。Hyppolite は「絶対者は媒介である」と云い、Hegel の独創性は「絶対者の中に反省をおき、それによって二元論を廃止することなしに二元論を乗り越えることである⁽¹¹⁾」と云う。媒介は窮極的には絶対者—概念、精神—の自己との自由な媒介であり、それは精神のあの自己分割と分割されたものにおける自己融和である。それは一面では分析的であると同時に他面では総合的であり、**tautologique** であると同時に **hetelologique**⁽¹²⁾ でもある。Hegel の論理学は単に一元論の **Tautologie** でもなく、単に二元論の **Hetelologie** でもなく同時にその両者

である。Hegel が「すべてのものは判断である」と云い (Syst. § 167), また同じく「すべてのものは推理である」とも云う (Syst. § 181, Log. II. s. 126) がこの二つ命題は二者択一的なものではなく、一つの事柄の中で同時にどちらも成立するのである。分割区別の中における媒介的統一、一元的なものの中の二元的対立と、二元的対立をそのままにして、それを乗り越え、それを内に含む一元論が主体としての絶対者の思弁的本性である。Hyppolite はこういう主体の媒介的活動を「現象の背後にある本質という形態において自己本来の発現より先に存在することなしに現象を実存させる」活動であると云う。⁽¹³⁾ あらゆる規定的現存に先立ってあることなしに、⁽¹⁴⁾ その中にあるその内的生命——思弁的生命——たる主体としての活動は媒介活動をおいて他にない。それは本質的には自己との自由な媒介である。真の媒介は「外的ものとの、または外的なものによる媒介でなく、自己そのものの中で自己を完結する媒介」である (Syst. § 69)。

主体の媒介的活動の中で規定性の直接性が止揚されて契機として全体的なものの中に含まれることを Hegel は観念性 *Idealität* と云う。観念性とは「直接的規定性の止揚」である (Syst. § 115. Zusatz s. 269)。直接的に存在するとみられる有限的なものは実際は否定的なものであり、無限的なものの契機である。それを「有限的なものの真理はむしろその観念性である」と云う (Syst. § 59)。だから「観念的なもの」*das Ideelle* とは「真無限的なものの中にある有限的なもの」である (Log. I. s. 174)。Hegel が観念的という時、それは一般に考えられているような想像的なもの、実在しないものという意味ではない。むしろ直接経験される有限的なものこそ真実でないものであり、その真実性が観念性をなすのである。観念性は実在性と並んである非実在性なのではない。実在性と観念性とは一般に考えられるように相並んである対立概念ではない。「観念性の概念は実在性の真理」なのであり、「実在性はそれが即時的にあるところのものとして措定されると、それ自身観念性として自己自身を示す」のである (Syst. § 96. Zusatz s. 228)。哲学的考察は本来、有限的なものをそれだけで真理と見做さず、かえって有限的なものの真理はその観念性にあるとみるものであるから、「あらゆる哲学は本質的に観念論であり、或は少くとも観念論をその原理としてもっている」のであり (Log. I. s. 181), 「有限的なものの観念性は哲学の主要命題であり、従ってあらゆる真の哲学は観念論である」 (Syst. § 95)。

観念性とは直接的規定性の止揚であり、有限的なものの真理である。ところ

で有限的なものがその中で止揚されるそのものは無限的なものである。止揚されるのは有限なものだけで無限的なものは止揚されることはない。それなら無限的なものは観念的でない実在的なものであろうか。Hegel は観念性の説明にあたって、「先づ最初は止揚された諸規定性の性質」として、それをその中で止揚されるものと区別された意味で規定している (Log. I. s. 187)。止揚されることのない無限的なものは確かに実在的である。しかしそれが実在的であるのは有限的なものが直接的な意味で実在的と考えられるのと同じ意味で実在的であるのではない。絶対者、精神はそれ自身活動であり、しかも媒介の活動である。それは自己との自由な媒介活動であっても、「媒介」活動である限り否定的な活動である。その中にはそれ自身の肯定性を主張し得るような直接的規定性としてあるような何物もない。あらゆる規定性は否定的契機としてその中に含まれているのであり、その活動の全体も否定的活動であり媒介活動であって直接の肯定的活動ではない。その媒介が外のものとのまたは外のものによる媒介でなく、自己自身との自由な自己媒介となるとき、その媒介は止揚されて直接性を回復しはするが、それは否定の否定による肯定であって、直接的肯定ではない。否定の否定による肯定は区別の中における、区別の形態をそのままにしてその止揚による同一である。そういう同一はそれ自身また観念的である。無限なものが実在的であるのは媒介の止揚という意味で「より高い意味における実在性」である (Log. I. s. 174)。だから原理、普遍的なもの、概念、理念、精神は観念的なものであり、そして感性的なものは勿論原理や概念や精神の中で止揚されたものとして観念的なものである。だから Hegel は観念的なものは二重の意味を、即ち(1)観念的なものが具体的なもの、真の存在であること、(2)具体的なものの中で止揚されているその諸契機が観念的なものであるという二重の意味をもっていることを注意している (Log. I. s. 182)。Hegel は自ら「概念の立場は一般に絶対的観念論の立場である」と云い (Syst. § 160. Zusatz s. 353)、また我々の直接に知る事物は我々に対してばかりでなく、それ自身において現象にすぎず、従ってその存在の根拠を自己自身のうちにもたず、普遍的な神的理念の中にもつということが有限的事物に固有の規定であるとみる自分の立場を、批判哲学の主観的観念論に対して「絶対的観念論」と呼ぶ (Syst. § 45. Zusatz s. 138)。こういう Hegel の観念論を Marcuse は「Hegel の観念論は決して認識論的原理を意味せず、存在論的原理を意味する」と云う。⁽¹⁵⁾

思弁的なものは「思惟された理性的なもの」である。理性的なものは Kant における同じく「無制約的なもの」である。しかしその無制約的なものは被制約的な現象の彼岸に当為としてあるのでなく、現象の真只中にあるその内的思弁的生命として、否定的にはあるが「自己の規定性を自己の内に含んでいるもの」である (Syst. § 82. Zusatz s. 196)。それが思惟されてあるというのは、それが直接的なものとしてではなく、その真実態において、真無限的な自己との自由な媒介という自己反省の形態においてあるという意味である。だから思弁的なものは「単なる主観的なものでなく、むしろ悟性はその傍に立止まっているかの諸対立を（従って主観的なものと客観的なものとの対立をも）止揚されたものとして含んでいるところのもの」である。そういう思弁的なものは宗教に関して神秘的なものと一般に云われるものと同じものである。しかし神秘的なものは「秘密に満ちたもの」ではあるが理解することのできないものではない。それが理解し難いのは「悟性に対してだけ」である。それは悟性の原理が抽象的の同一性であるのに反して、神秘的なもの（思弁的なものと同じ意味をもつものとしての）が悟性にとってはただ分離と対立においてのみ真理とされる諸規定の具体的統一であるからである (Syst. § 82 Zusatz s. 196-198)。思弁的なものは悟性の合理的思惟からみれば確かに「神秘的」であり非合理的或は超合理的である。

Kroner は Hegel の概念が全能であり、思惟されない何物もないという意味で Hegel の思惟は Rationalismus であるが、その Rationalismus は悟性のそれと違ってそれ自身の中に Irrationalismus を含んでいると云う。Hegel の思弁的思惟は上述のように悟性とその前に立止まってしまう神秘的なものを含んでおり、悟性の理解し難いものを理解する思惟だからである。そういう思惟の思弁性を Kroner は非合理的 irrational, 超合理的 überraional, 或は反合理的 antiraional であると同様に合理的 rational であると云う。そういう思弁性の根源を Kroner は生命のある思惟、即ち主体であるところの概念にあるとする。そしてそういう思弁的思惟をもって哲学する Hegel を Kroner は歴史を通じて最も偉大な Irrationalist であると評する。そのわけは Hegel が非合理的なものを合理的なものと対立させて何らかの仕方では思惟の外に定立したり要請したりするからであるというのではない。そういう非合理主義は Hegel に比較すればむしろ合理主義である。何故ならそれは非合理的なものと合理的なものとの分離対立させて両者の対比を合理的に扱うからである。Kroner が Hegel

を **Irrationalist** と呼ぶのは (1) 彼が非合理的なものを思惟の中で妥当させ、思惟そのものを非合理化すると同様に他方では、まさにこの非合理化によって超合理的なものに固有の合理性を呈示するからであり、(2) 概念が自ら運動すること、そして概念の運動が自己崩解を含んでいることを説くからである。また (3) 彼が弁証法家であり、その弁証法が方法にまで仕上げられ、合理化された非合理主義そのものであり、その弁証法的思惟が合理的-非合理的思惟 **rational-irracionales Denken** であるからである。こういう非合理的神秘性の合理化は古い形而上学的実体を主体としてのロゴスに置きかえたことに由来する。**Hyppolite** はそういう思弁的な絶対的思惟は「存在論的秘密の消失を意味する⁽¹⁷⁾」と云う。**Kroner** の云う非合理的なものの合理化は存在論的秘密の消失である。

絶対者の真無限的自己関係においては有限な諸規定性は、その本来の否定性が措定され、改めて無限的絶対者の自己展開の媒介的契機として新しい意味において肯定され、有限なその規定性が無限性と結合し無限性を宿すのは仏教的に云えば往相を経て還相において生きかえるのに等しい。それは云わば思想の一つの頂点である。**Bernard Lakebrink** は「**Hegel** において近代的思想はその頂点に達している」と云い、「**Hegel** の哲学は西欧中世末期の唯名論の時代から今日の実存主義に至るまで展開したあらゆる思想の云わば中心を示している」と云う。そして弁証法が **Kierkegaard** から **Karl Barth** に至る神学のみならず、その最も手厳しい敵手、経済学的唯物論にとっても本質的意味をもつものであるとして、「現代の実存的弁証法もまたこの方法の熱い息吹にはばたいている⁽¹⁸⁾」と云う。**Fackenheim** も近代プロテスタント的信仰の中に現われている現実と世間的現実とは二つの現実ではなく、一つの現実の二面でありこの二つの面は含蓄的には既に結合されている。そして一つの現実を二つの相において認識する哲学があればそれは潜在的に含まれているものを明示的に示すものであるが、**Hegel** の哲学はまさにそういう哲学であり、「神の知識を世界の知恵と、いや更に世間そのものと結びつけることができる⁽¹⁹⁾」と云う。この二人の評言は **Hegel** の哲学の思弁的思惟の高さを示すものである。

Kierkegaard は **Hegel** の思弁的思惟の中の「媒介」の概念を無意味なものとして、「それは何にもならない。我々は彼の予備的研究から何の得るところもない。というのはそれによって明瞭な真理が得られるのではなく、人間の魂に祝福が得られるわけでもないからと云う。**Kierkegaard** の **Hegel** 批判は極めて⁽²⁰⁾

手厳しい。しかし Hegel の論理学を単に一つの出来上った知的な思想体系として眺めるなら或はそうも見えようが、Hegel の論理学は精神現象学における知の深化の体験を経た後の所謂絶対的知の境地にあるのである。論理学の思惟は全く抽象的な思惟であるが、その抽象的というのは経験的現実からその一面を抽象する悟性的抽象ではなく、事柄自身の内面に、そして同時に事柄を思惟する自己自身の内面に沈潜する抽象であって、「私の主観的な特殊性を放棄」するのであり、「事柄の中へ沈潜」するのである (Syst. § 24. Zusatz. II. s. 87)。Kant が百ターレルの概念とその實在との相違をあげて、Anselmus の神の存在論的証明を批判したのを論評して「特殊的有限的有から翻って全く抽象的普遍性においてある有そのものを指し示す Zurückweisen のは何よりも先ず第一の論理的要求であると同様に実践的要求である」と云い、もし天が崩れ落るなら恐れることなくその破片に打たれるという Horatius の言葉をひいて、「キリスト教徒ならこういう無関心さの中にあるべきである」と云う (Log. I. s. 97-98)。純粹抽象としての普遍性が悟性的抽象のそれではなく、あらゆる規定性の根源にかえり、その根底にあるものとして文字通り zurückweisen されるものであるなら、そういう抽象的思惟には有限的なものへの無関心性、それからの超越という実践的態度が必要である。実践的要求は理論的要求に附随して単に「実践的要求でも」あるとして要求されるというよりも、むしろ実践的要求が満たされなければそういう理論的要求も不可能だというべきであろう。精神をして真理の吟味に習熟させるのはただ所謂表象、思想、臆見に対して絶望を成し遂げることによる (Phän. s. 72)。Hyppolite は思弁的認識は自己意識であるが、単なる人間の自己意識でなく存在の普遍的な自己意識であるとして、人間は「ロゴスの住居」であり、反省の自己は単なる人間の自己から存在の自己となるために中心が変えられなければならない⁽²¹⁾と云う。人間の自己から存在の自己になるために中心を変えるのは単なる知的な作業ではなく実践的な修練を俟たなければならない。また Mure は哲学的論理学者として必要な第一の態度として、有限的な思考者としての自己をこえること——但し自己の有限性を棄て去るのでなく構成し直すのであるが——を最初に挙げている⁽²²⁾。この言葉もまた Hyppolite の中心の変更と同様に実践的要求であることは明らかであり、しかもそれが第一の要求として挙げられていることは、Hegel の純粹思惟、絶対的知がむしろ実践的な自己超克を前提にしていることを示している。Kroner は「認識の問題は Hegel においては体験の問題にまで深められ広げられてい

(23) 』と云うが、単に体験の問題にまで拵げられているだけでなく、むしろ体験の上に立てられているというべきであろう。Fackenheim は「もし Marx や Kierkegaard が Hegel を非難するなら、それは Hegel が的外れだったり馬鹿げているからではなく、あまりに満足に近いからである」と云い、Hegel の特有の言葉、理念、精神、自由、神、世界そして特に理性という言葉は経験に外から持ち込まれたものでなく、経験からそれも窮極の意味において全経験から浮かび出たものであるから、それらをその充実した意味でその始まりにおいてではなく、その終りにて評価されるべきであると云う。そして真摯な研究者達でさえ屢々 Hegel をその最初の抽象的な諸定義に基いて誤った批判をするが、そのもとは、Hegel の論理学では理性が経験から浮かび出る過程を既に通過しているのに反して彼等自身はその過程をまだこれから通らなければならないという相違にあると云う。⁽²⁴⁾ まことに当を得た言葉というべきである。思弁的思惟を存在の自己意識とみて人間をロゴスの住居とする Hyppolite は Feuerbach は絶対的精神を人間とし、Marx は自己意識を人間に置きかえたのであり、人間の謙虚な反省の自己意識を喪失して「人間性を神化」したと云う。⁽²⁵⁾ 思弁的思惟の含む非合理性を悟性的に合理化すると、思弁的思惟の中に含まれていた人間の根源の絶対者の神秘的な深みは消失して人間自身が最高の絶対者となるのである。そこでは形而上学的論理学はその形而上学的本性を失って単なる合理的論理学となる。論理的なものの第三の契機、思弁的或は肯定的理性的側面が思考に馴れない者にとっては最も困難なものではあるが、人間が自己の本質を見究め、存在の根拠を明らかにするのに最も大切なものだと思われる所以である。

註

- (1) R. Kroner: Von Kant bis Hegel. II s. 443.
- (2) G.R.G. Mure: A Study of Hegel's Logic. P. 34
- (3) J. Hyppolite: Logique et Existence. P. 74
- (4) G.R.G. Mure: A Study of Hegel's Logic. P. 35
- (5) G. Noël: La Logique de Hegel, P. 24
- (6) J. Hyppolite: Logique et Existence. P. 79
- (7) G.R.G. Mure: A Study of Hegel's Logic. P. 51
- (8) a. a. O.
- (9) H. Marcuse: Hegels Ontologie. s. 67
- (10) R. Kroner: Von Kant bis Hegel. II. s. 421

- (11) J. Hyppolite: *Logique et Existence*. P. 74
- (12) *ibid.* P. 117
- (13) *ibid.* P. 79
- (14) *ibid.* P. 70, 72, 78
- (15) H. Marcuse: *Hegels Ontologie*. s. 69
- (16) R. Kroner: *Von Kant bis Hegel*. s. 271, 272, 282
- (17) J. Hyppolite: *Logique et Existence*. P. 113
- (18) B. Lakebrink: *Hegels dialektische Ontologie*. s. 9
- (19) E.L. Fackenheim: *The Religious Dimension in Hegel's Thought*. P. 11
- (20) E. Hirsch: *Kierkegaard— Der Begriff Angst*: s. 9
- (21) J. Hyppolite: *Logique et Existence*. P. 91-92
- (22) G.R.G. Mure: *A Study of Hegel's Logic*. P. 42
- (23) R. Kroner: *Von Kant bis Hegel*. II. s. 374
- (24) E. L. Fackenheim: *The Religious Dimension in Hegel's Thought*. P. 8
- (25) J. Hyppolite: *Logique et Existence*. P. 231, 233